

P-177^{*} 腺様嚢胞癌6例の臨床的検討

東京都立駒込病院外科

○西村嘉裕、池田高明、酒井忠昭、半谷七重、森山裕一

【目的】外科治療を行なった腺様嚢胞癌6例について、臨床的検討を行った。【対象】1993年5月までに経験した腺様嚢胞癌6例で、同時期肺癌手術症例の約0.5%に相当する。年齢は27～66歳(平均49歳)、男2例、女4例である。

【結果】発生部位は気管3例(気管狭窄による喘鳴1例、呼吸困難2例)、左上葉分岐部直下1例(食道癌の気管支鏡検査)、左下葉1例(脳転移治療後に精査)、左主気管支1例(左肺無気肺による呼吸困難)で、()内は発見動機である。気管原発の3例には気管管状切除(5～7気管軟骨)が施行されたが、病理学的に断端陽性で50～60Gyの術後照射が行なわれた。この3例は術後8年1カ月生存、術後5年1カ月生存(両側肺転移に対し切除施行)、術後3年9カ月肝臓癌死している。左上葉分岐部原発症例は左上幹・下幹切除、気管支再建術が施行されたが、病理学的に断端陽性で50Gyの術後照射が行なわれた。この症例は術後2年3カ月局所再発なく生存している。左下葉原発の症例は、2回の脳転移巣切除後全脳照射60Gyが施行され、左肺全摘により原発巣の切除が行なわれたが、脳転移治療開始後1年9カ月後癌死した。左主気管支原発の症例は下部気管・左右主気管支切除、気管分岐部再建術が施行され、術後照射が行なわれている。

【まとめ】腺様嚢胞癌は気道再建を行い断端陽性例となることが多いが、術後照射がかなり有効であった。

P-178 肺良性腫瘍切除例の臨床的検討

日本大学医学部第2外科

○並木義夫、大畑正昭、飯田 守、大森一光、中岡 康、伊良子光正、北村一雄、小笠原弘二、村松 高、長坂不二夫、西村 理、羽賀直樹、古賀 守、瀬在幸安

【目的・対象】肺良性腫瘍の発生頻度は肺癌に比べ極めて低いが、肺癌との鑑別は非常に困難で確定診断のために開胸手術が行われることが多い。今回われわれは当科で経験した肺良性腫瘍切除例、とくに、肺過誤腫および硬化性血管腫について臨床的検討を行った。1973～1993年3月末までの間に当科で経験した肺良性腫瘍切除例23例を対象とした。肺結核、肺化膿症などの炎症性病変は除外した。

【結果】疾患の内訳は、肺過誤腫19例、硬化性血管腫4例であった。発見動機は、検診で胸部異常影指摘されたものが全例(23例)であった。年齢は6歳から67歳、性別は男性11例、女性12例であった。術前診断は肺過誤腫では、良性腫瘍8例、肺過誤腫6例、肺腫瘍3例、肺結核1例、縦隔腫瘍1例であり、硬化性血管腫では4例とも良性腫瘍と診断された。術式は、肺葉切除術2例、区域切除術1例、部分切除術7例、核出術13例であった。

【結語】肺良性腫瘍、とくに充実性腫瘍においては肺癌との鑑別が困難であった。術前に確定診断が得られない症例に対しては積極的に診断と治療を兼ねた胸腔鏡下手術または開胸手術をおこなうことが望ましい。

P-179^{*} 癌性胸膜炎症例の予後：胸水と血清のパラメータを中心として

名古屋大学第一内科肺癌化学療法グループ

○坂 英雄、渡辺 篤、長谷川好規、酒井秀造、大宜見辰雄、山本雅史、天野博史、岩田全充、宮地卓也、中島一光、若山尚士、下方 薫

【目的】癌性胸膜炎患者の予後は、胸水のpH、ブドウ糖値と相関するといわれている。そこで癌性胸膜炎症例で診断時に採取した胸水と血清のペア検体を用いて予後に寄与する因子を解析した。

【方法】癌性胸膜炎癒着療法での2つの臨床試験(PL-891102, PL-900214)に登録した84名を対象とした。生存は癒着療法開始日から計算し、生存曲線はKaplan-Meier法、有意差検定は一般化Wilcoxon法、logrank法を用いた。

【結果】男女比43/41、年齢中央値は67歳(34歳-88歳)、原発巣は肺癌56例(腺癌42、小細胞癌5、大細胞癌3、扁平上皮癌1、他5)、胃癌5例、乳癌3例、子宮癌3例、卵巣癌2例、他15例であった。単変量解析ではWHOのPerformance status 1-2、乳癌症例、胸水総蛋白4.5 g/dL以上、胸水beta-2-microglobulin 3.0 mg/mL以下で有意に生存期間が長かった。胸水のpH<7.30またはブドウ糖<60 mg/dL群の予後が悪いということはなかった。Coxの比例ハザードモデルを用いた多変量解析の結果も報告する。

P-180

癌性胸膜炎の検討

- 胸腔内エトポシド投与の有用性を中心にして -

久留米大学第一内科¹、同 放射線科²

○力丸 徹¹、田中泰之¹、市川洋一郎¹、大泉耕太郎¹、藤本公則²、目野茂宣²、早瀬尚文²

(目的) エトポシド(VP-16)胸腔内投与の有効性を薬物動態を含め、OK-432胸腔内投与と比較検討する。なお、当科における癌性胸膜炎の特長および治療成績を明らかにし、VP-16胸腔内投与がこれまでの治療法にまさるか、否かを検討する。

(対象) 組織学的または細胞学的に診断された癌性胸膜炎患者90例(男性55例、女性35例)で、原疾患は肺癌76例、乳癌9例、その他5例であった。肺癌の組織型は、腺癌57例、小細胞癌10例、扁平上皮癌6例、その他3例であった。その内、36例をprospective studyで行った。

(成績) VP-16体内動態; T max 2-6時間 C max 1.54-8.18 μg/ml, MST; VP-16 166日, OK-432 159日

(結果) VP-16胸腔内投与は、OK-432と比較して治療効果に差を認めなかったが、副作用は軽微であった。